

# グルムキー文字

岡口 典雄

インドのパンジャブ州アムリトサル県南東部のピアース川に近いカドゥールは、スィック教(シーク教)の第2代グル・アンガド(1504~1552)が移り住み、活動の拠点とした村です。グルとはスィック教の教主を意味する尊称です。村に建立されたグルドゥワラー(スィック教徒の礼拝堂)の堂内にはグルムキー文字の字母表が掲げられ、表の下には「このグルムキー文字は衆生の救済のためにグル・アンガドが創始した」と書かれています。

グルムクは「グルの口」を意味し、「グルの口から発せられた教えに従う敬虔なスィック教徒」に対する呼称です。グルムクが用いた文字体系の名称がグルムキーです。グル・アンガドは歴代のグルの中でもとりわけ子供の教育に情熱を注いだことで知られ、教育手段としての文字体系の改良と整備に大きな業績を残しました。しかし独自の文字体系をすべて創始したわけではありません。字母表の配置整備や字形の改良などは確認されませんが、個々の字体はスィック教の開祖グル・ナーナク(1469~1539)以前の時代から存在していたものを多く含んでいます。

それまでインド北西部ではカースト集団を中心とする各コミュニティが、それぞれに独自の情報の伝達や記録の手段として、固有の文字を用いていました。ヒマラヤ山麓部ではターカリー文字、また平野部ではランダー文字と総称されます。しかしこれらの文字はヴァラエティーに富むその形状のために難読であり、母音表記法も不完全でした。グル・アンガドはターカリー文字・ランダー文字に含まれる種々の字体を取捨選択し、字母表に配置し、さらに母音組織も整備しました。このグルムキー文字はスィック教徒のみならず、パンジャブ州一帯に広まり、今日ではインドのパンジャブ州の公用語であるパンジャービー語の表記文字となっています。パンジャービー語を母語とする人は、インド・パキスタン両国で約8000万から9000万人ほどいますが、パキスタンではペルシア系の文字を用います。インド系のグルムキー文字を用いるのはインド国内の約3000万人です。

グルムキー文字の字母表は35種の基本形から成り、パェーンティーと呼ばれます。パェーンティーは35を表すパンジャービー語の基数詞です。35種の字母だけでなく10種の母音記号・鼻音化記号・促音化記号にもすべて名称があります。口頭でつづりを伝える場合、発音だけに依らず、文字や記号のイメージと直結した呼び名を活用することができます。

同じ宗教を信仰する話者の間では、あいさつには常にその信仰に由来することばが用いられます。下にあげる例は、パンジャービー語を話すスィック教徒が「こんにちは」をグルムキー文字で書いた場合です。

ਸਤਿ ਸ੍ਰੀ ਅਕਾਲ
sati sṛī akāla (綴り)
[sət̪ sri: əka:l̪] (発音)
サト スリー アカール

サトは「真実の」、スリーは「呼び名の前に付けて崇敬の意を表すことば」、アカールは「時を超えた永遠のもの」の意味で、スィック教における神の概念を述べる用語です。

## [参考文献]

- 岡口典雄『エクスプレス・パンジャービー語』、白水社、1988.
- 溝上富夫『パンジャーブ語基礎 1500語』、大学書林、1988.

(町田和彦編著『華麗なるインド系文字』白水社2001, pp. 170-171より転載)